

指導要綱改訂・教科書改訂にともなう大幅カリキュラム改訂

平成 23 年度改訂後の小学校教科書内容は、ゆとり教育以前の教科書のページ数よりも大幅に増えました。ゆとり教育後のページ数の合計は 3050 ページでしたが、改定後のページ数の合計は 4645 ページとなっています。算数・理科はともに 67 %、国社算理の 4 教科は 50 %、全教科では 43 % 増えた計算になります。こうした内容を学校現場でこなし、お子さんたちに理解させられるかが今後の大きな課題になることでしょう。

中学校も同様です。平成 14 年には 2771 ページにとどまっていたものが、平成 24 年には 4077 ページに増えています。約 1.5 倍の増加です。とくに数学では問題数の増加によって 63 パーセント増、教科内容も英語単語数 900 語から 1300 語への増加に見られるように、大幅拡充が行われています。

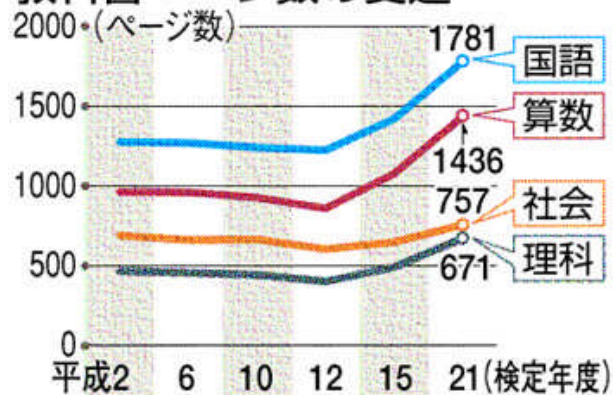
このページ増の背景には、新学習指導要領に掲げられている「理数教育の充実」、「言語教育の充実」、「外国語教育の充実」、「伝統や文化に関する教育の充実」など、全方位的な教育の充実という理念があります。「ゆとり教育」による学力低下を不安視する世論と、その懸念が PISA という国際的な学力評価によって裏付けられてしまったことと、資源のない日本にとって、高い学力に支えられた人材は、国際競争力の維持に必要不可欠とする危機感のあらわれでしょう。こうした状況に対応するために「おちこぼれることなく生徒全員が最低限の学力を身につけられるカリキュラム」という理想主義から、「上限を設けることなく、学力上位層をできるだけ伸ばす」という現実主義へと、国の教育方針は大きく舵を切ったのです。つまり「最低限扱わなければならないことをクリアしていれば、その先どこまで扱うか、どこまで扱うか、どの程度プラスαの内容を載せるかは教科書によって違ってかまわない」（上規定から下限規定へ）となったのです。「そんなに内容を増やして、本当に全部授業でこなせるの？」という心配がでてくることでしょう。学校でも「これ以上は学校の授業では扱えません」、家庭教育の中で考えてください、とはっきりと言っています。あるいは、「それ以上扱います、教育します」という学校もでてくるでしょう。つまり**差別化**が進むということです。学校間でも、生徒さんの**能力間格差**が増大するということになります。人間的で高度な全人格的な教育をどう構築していくか。日本社会の未来を占う点でも大きな問題です。当スクールとしては、知力学力もそなえた人間力を涵養するトータルな教育を目指していきたいと考えています。

こんなに変わる小学校・中学校の教科

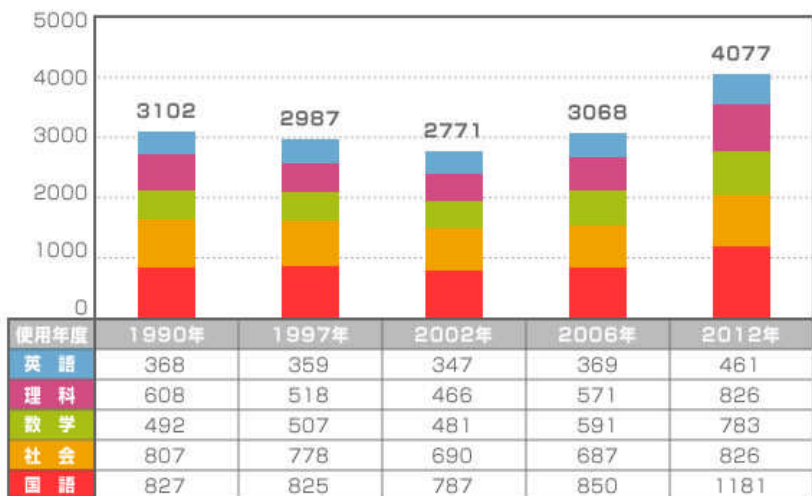
小学校新教科書

中学新教科書

教科書ページ数の変遷



※国・算は1～6年、理・社は3～6年の統計



そこで当スクールでは、教育改革について新しい理念や手法を組み立て直し、発信していくためにホーム・ページを立ち上げましたのでご案内いたします。

